



研究紹介

長崎大学高度感染症研究センターの研究や研究者を紹介するコーナーです。
今回は感染分子病態研究分野の津田祥美准教授です。



古来より様々な感染症が猛威をふるい、歴史にその跡を残してきました。世界に目を向けると、今なお、感染症は人の死因の大きな割合をしめています。また、エボラウイルス病や新型インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症、さらにはエムポックス（サル痘）のように、次々と新興 / 再興感染症が出現し、大規模な流行は社会生活や経済活動へ大きな影響を及ぼしています。私たちは、研究や教育を通じて、感染症対策に貢献していきたいと考えています。

感染症対策にとって、ウイルスについて知ることは、非常に重要です。私たちの研究室では、エボラウイルス病や SFTS（重症熱性血小板減少症候群）などの重篤なウイルス感染症の病態解明を主なテーマとして研究に取り組んでいます。例えば、エボラウイルスは紐のような形をしており、ラテン語の“filo（糸）”から名付けられたフィロウイルスというウイルスの仲間で、出血熱などの重篤な感染症を引き起こします。その高い病原性に加えて治療法が確立されていないことから、BSL-4 実験室で取り扱うことが決められているウイルスのひとつです。エボラウイルスは、感染した動物や患者の体液に接触することで感染します。感染初期には、発熱、倦怠感、喉の痛み、下痢や嘔吐など風邪のような症状を示します。では、体の中で何が起きているのでしょうか。体内に侵入したエボラウイルスは、標的とする細胞に感染します。やがて細胞内で増幅されたウイルスは全身の臓器に広がっていきます（図 1：ウイルスタンパク質が検出される様子）。それと同時に、体の中では免疫反応をはじめとした防御反応が誘導されます。また、ウイルス感染により細胞が傷つけられたり臓器の機（P4に続く）

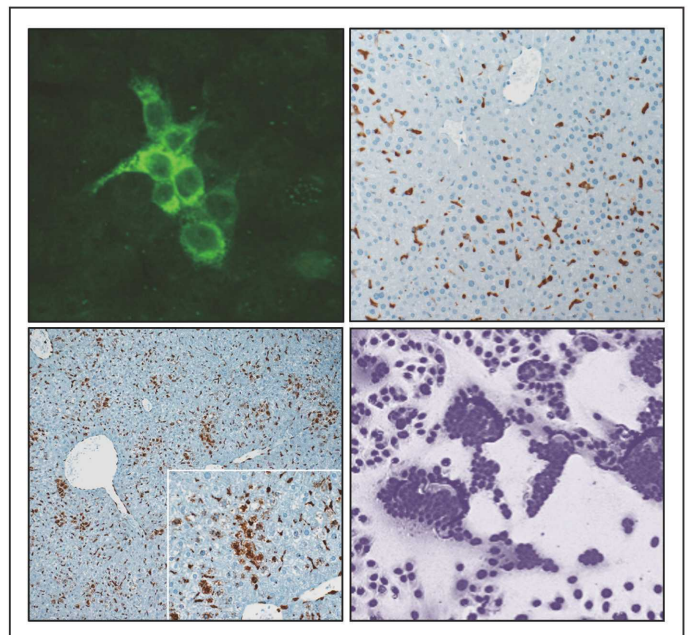


図 1 ウイルスタンパク質、感染細胞等の検出

BSL-4 Report から感染症ニュースへ

これまで地域連絡協議会での意見交換等の様子は「BSL-4 Report」でお伝えしてきましたが、高度感染症研究センター設置を契機にこれまでの地域連絡協議会のご報告に加え、センターで行われている研究の情報や感染症に関する身近な話題を紹介する地域広報誌「長崎大学高度感染症研究センター感染症ニュース」として、内容を充実させてお届けすることにいたしました。